

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 70: 51-70
Issue date	1899-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5219">http://hdl.handle.net/2298/5219</a>
Right	

也前途遼遠、歲不待我、宜夙夜匪懈、孜孜積學磨才也、言未終、孤雁一聲、掠耳而過、書窓耿耿、意氣爽然、

雜

報

## ○己亥之新光

長風天山の頂より吹きて、掠めて黃海の邊に至る、暮雲迢々轉た悲蕭の觀をなすものは、豈極東の危機を表はすものにあらずや。孤雁誰々晴蜒州に鳴きて哀音を送るは我邦道義界の危機を報ずる聲ならざるか。今や十九世紀最後の歲は來れり。麗かに輝きま新歳の光には幾多晴れやらぬ疑團の班々とまて映するを見き。

吾人の今日は素養の時なり蘊蓄の期なり、吾人は未だ世界の舞臺の面に立てる演者にあらず、吾人の舞臺は將來にあり。然れども時代は連續す、今日は過去の將來なりしに非ずや。世界の事物突如として起りて何の連續なきものならむには過去を説かず將來を言はず、如何せむ幾多複

雜の事と物と相連り相亘りて貫通するものなるを。時代の繼承者たるもの豈に其時代を看過すべけんや、現今世界の活動は明に東南洋の處にあるを見る、十九世紀末より廿世紀始に通して吾人の耳目には適切なる幾多の事件の到達するあらむ。吾人の出で、世界の舞臺に上らむとき、此等の事件は其境を廣く其事を大にまて眼前に横はるべきなり。其時に當りて吾人今日の準備素養の如何は證せられむ。若し夫れ之を内にして日本社會現時の道德に至ては更に吾人の一考を煩すに足らざらむや。維新の主働者は時勢人心の轉向と泰西文明輸入の基礎とを作りて白玉樓上に昇り、彼等の餘光に浴する繼承者は可惜哉其の人心の轉向と文明の輸入とを善導する能はず、即ち見時社會道德基礎の懷損を來せり。公德と私徳との分離今日の如く甚きはなく、敗徳の政治家廟堂に誇り不義の實業家社會に傲

り殊に教育家宗教家に於て其私徳の癡敗、品性の卑下甚きに係らず社會能く之を容れて怪まざるもの、一に社會道德の基礎確定せざるによるにあらずや。過去數百年日本道德の基礎は實に武士道にありき、所謂武士道は之を今日に用ゆべからずといへども、當時に於ては是れ實に日本道德の基礎をなす社會の風教徳義之が爲めに肅然とて維持せられたのみを見ずや。半宵獨り夢を成さず、思を乾坤に馳すれば蕭々乎沈々焉風物の時に日に變轉するを觀る。夫れ教を高等に受るものは即ち次代の中堅を形る元素にあらずや。數に於て多からざるべし、然れども一人物の影響が如何に民衆に向へ多大の教訓と感動とを與ふかを知らば吾人は宜しく遠大なる思想と高崇なる品性を養ふに怠るべからざるなり。年端に際して不吉の辭を述ぶるを責むる勿れ、而して特に之を本年に言ふもの、豈に徒に辯を好みて爾せむや、ア、豈徒に辯を好みて爾かせむや。

## ○紀 元 節

恭しく惟みるに 皇祖神武天皇渾沌たる中原を

平定させ始めて大御位に即かせたまひてより茲に二千五百五十有九年 皇統連綿天壤と共に窮りなく國力日に揚り威靈八荒に及ぶ嗚呼熾なるかな嗚呼熾なるかな謹んで祝し奉る

## ○弓術部秋期大會 部 員 某

十二月三日。校の東北。松林の下なる射場に於て。弓術部秋期大會は開かれたり。薙を敷き。幔幕を張り。弓を連ねて。用意おさくゝ怠りな。午後一時頃にもなりて。集り來りたる人々は。生駒師範をはじめとして。東。園。嶋野。緒方の諸先生外來の人々は。佐田。大岩の二氏。生徒にありては。山口。内藤の兩委員なり。納富。平田。岩田。磯稻川。野村。板井。土屋。丸山。鬼。今井。大木。常吉の諸君。凡二十五六名なり。いづれも。我こそは。天晴の功名して呉れんす。拳を握りて。弦聲空にひびき。飛箭風を研るの時を。今や遅と待ちかけたり。既にして。一寸の金釣は掛けられて。蛟龍の眼もかくやと輝き渡れり。滿筵の勇士。誰か射切らんずらんと。片唾を呑んで見つめたり。空を切りて飛び去るは。引手やあまり強かりけん。地をうちて音するは。思はず腕やゆるみけ

ん。左によるあり。右に立つあり。廿余人の射手。立ちかわり入りかわり。引けども射れども。徒らに長閑するのみにて。いまだ憂然の音を聞かず。否。憂然の音は數たび聞けど。『中り』の勇ましさ。聲を聞かず。我こそはくど。思ふけさきは見ゆれども。早矢はいつしか射盡きて。乙矢もやがて飛び去りぬ。二立目亦遂に中らず。こはとも如何にと怪しまるゝばかりなり。かくてはならじ。此度ばかりをニツにせんとて。今一ツの金的は。相並んで爛々たる事。恰も吾等を睨むに似たり。すは此度こそと。氣昂然。よく引て放てども。中らざるもの十數番。岩田君。肅然進み出でつ。其の名にちなみて梓弓。満月の如くに引続たり。此の時。座中やよ。金的將軍。見事あて玉へと。聲を揃えて言ひければ。其の儀ならばと言はぬばかり。『まは深く引さしほり。放ちたる矢はあやまたず。爛々たる怪物の。右の眼を射ぬきたり。』中り』の聲もろともに。矢取が嬉まげに飛びたつに。満筈の面々。手を拍て叫べは。其聲天に轟きて。手本の松を吹く風も。やがて喝采の聲と化え。生駒師範の寄附にかゝる。見事の賞品は氏の手に

落ちぬ。是より尺二。五たちの競射にうつる。生駒師範。東先生。共に九分の最高點を得まひ。以下順次十二等迄賞あり。其の人々を擧ぐれば。三等山口。四等板井。五等内藤。六等土屋。七等磯。八等野村。九等納富。十等平田。十一等常吉の諸君。及十二等は緒方先生なりき。是より射割となる。前の矢上れば後の矢下り。一矢左すれば一矢は右し。縁を叩きて。的を落したるは數多なりしも。見事に中りて。落花の眺めをなさきめまは。三立中。たゞ平田君一人のみなりき。されば。岩田君の金の射られしは。さる事ながら。平田君の功名。また賞すべきかな。それより。三組に分ちて。八寸的を競射する事。立矢よりも早き光陰なれば。今は早や入相となりぬ。即ち弦をゆるべ。幕を撤し。席を卷きて。こゝに會を閉ぢたり。時恰も午後九時。

### ○討論會

修辭の必要を喋々するの愚を學ぶは吾人の欲せざる所然るに人多く講演に出きを置き。討論を看過せむとす。言を費さむか。波漫々々とて。限なく海鳥波間に眠りて。微搖の斯夢を驚かすな

若年の航海長船を行る縦横蒼を渡り碧を切りて轉た敏活を極む一度雲慘憺天の一角を走り狂風北溟の邊より翻れて怒濤千丈船轉す、策の出づべきを知らず茫然として自失す蓋し彼は能く平時の航海に熟す而して忽焉風雲の襲來に際まで其變に應ずるの素養を欠ぎ去なり我に説あり人只之を聞ふむとす我此時能く快辯流暢騶馬に輒て平地を行くが如きを得む然れども我辨を彼敗を我れ勝なりとして之を説けば彼れ他の是なるものを捉へ來りて迫至去其狀じや直ちに我胸を刺さ或は長劍ををかきまて頭を掠むるが如きに際まで能く狼狽せざるもの幾何ぞ蓋し精神の確乎たるによること尠からざるべしといへども亦其素養を缺きて焉を此域に達するを得むや討論のごと實に其素養の一たるを失はざるなり我國未だ辯論上の稚兒たるを免れず威風堂々傑人互に辯壇に爭ふの壯觀なく激越憤慨衆を去て正義の偉に感せずむる聲あるなし上下の議院冗語に疲れ國務を執るもの能く其の把るを明にする能はず遂に彼等をして實質請地に是れ勉めまめて討議問答以て公明の主義持説を明にす

るを第二義にせざる有爲の健兒今より討議論評の素養をなさずして可ならむや我演説部は二月八日を卜きて第二回の討論會を瑞邦館に試む題とするところ曰く『法律ノ命スル所ニ從フニ道徳上ノ義務フルヤ否ヤ』

金峰山嵐飽託の野を吹き荒れて、妖雲低く迷ふ、夕暮に至て風更に強く寒威恣に身を襲ふ而きて瑞邦館裡六時の定刻にありて集るもの已に五百と號す知らず場内如何の波瀾をか捲き來る見渡せば辯論の士結羅星の如く(一)皆て演壇に表はれざり去もの今此に之を見る者多く、南側に列なすは積極論者の、名稱は恒となく勇ましく北に扣へたるは消極論者と覺えたり江口貞次、積極論者の先鋒とまで表はれ鈴木棟一氏をが反對論者と號きてより論難交も始り積極論者とまでは今北、清家、山田、上塚、田口、柳井、大庭、本部、阿部の諸士最後は部長羽生教授も辯する所ありき上塚氏清泉の靈を吸ひたりけむ超乎たる態度を以て冒頭先づ吾は、極論者なるも積極論の旗色少く動きたれば積極論者として表はれたりと喝破を對手を戲倒し論殺したるさす或人

は之を評きて八淵蟠龍氏を聞くが如しといひたるもありきといふ鈴木氏に次で三澤氏出で三好氏出で船田氏出で大崎氏出で、消極論の鋒鋭甚だ鋭くアウレ堂々たる三軍の陣も此少數の奇兵の爲めに危がらひとまたり三好氏が自由の神正義の父として貴族ワシントンとは即ち當時の英國法律を犯せざるなりきと論じたるときは首うなづきしものあり同氏が論理の鋒先を以て羽生教授の説を破せし折又一部分の喝采を聞きぬかく論じ去り辯じ來りて更に結着なく顧みれば時已に半二時を過ぐ即ちこゝに之を散す深く謝す此日雜報手事あり精密に高論を傾聴する能はず爲めに記事の粗漏を來せるを諸士乞諒焉

題の少しく適切ならざるが爲めか抑も第一回の故なるか双方多くは除外の例特別の場合を擧げて互に外れ又寸鐵直に人の肺腑を衝くの快譽なかりしといへども其活氣は近頃始と見ざる所なりき有爲の士乏を試みるを度々以て後來門虎捕龍の活劇を演ずるの基を作せ

○寒稽古

寒風肌を劈き、凛然体を犯すの候に當り、誰かは

袂を擁して筆伏するの快を思はざらん、而も、驟然褥を離れ、氷よりも冷やかなる稽古衣を着けて、龍攘虎闘の活劇を演ず、誰か之を豪壯ならすと云、嗚呼此健兒豈寒氣を覺えざらんや、只彼等は能く己に克つ所以を知れるが故に然るのみ、寒稽古が、精神の修養上如何なる効力を有するかは、是れ吾人の今更喋々を要せざる所なり、只吾人は、精神的修養の外別に云ふべからざる趣味を感ず、此趣味は以て余中安眠の快に勝る幾等、今試に之を陳せんかな、

夜寒の微聲未だ止まず、余中ひそかに戸外の寒さと思ふの時、辰儀鏘然五時を報ず、此時眼瞼甚だ重く、加ふるに、褥中充分に暖まりて之を捨つるに忍びず、展轉するもの幾度を、此時懶鬼己に襲ひ來りて目前にあり、若し夫れ勇奮一番余を蹴りて起てば、懶鬼立るに散じて、寒氣思ひしよりも弱く、氷を砕いて口を美ぎ、躍りて戸外に出づれば、星斗欄干、履端蛰然として聲あり、試に一大喝す、意氣軒昂、心身爽然、應するものは只犬聲のみ、正に是れ天上天下只我と彼とのみの感あり、これ快事の一なり、若しそれ稽古衣を着

けり敵に對するに當りてや、敵の體軀は粉どもなれ、微塵どもなれ、三百六十の骨部、八萬四千の毛竅に、力をこめて挑み争ふ顛倒の音、叫喚の聲、曉天に響きそ天地一新するの感あり、これを快事の二とす、稽古已に終り、流汗を拭ひて道場を出づれば、曙光漸く龍山の松頭にありて、炊煙微かに村裡に上る、凜平たる龍田風も、春風の馳蕩たるが如く、顧みて、寝衣被むりたるまゝ、眠足らぬ眼をこすりつゝ、井戸端にたてる學友を笑ふところ、これ快事の三とす、食堂に入りては、其食力の他を凌駕するあるに驚き、教室の出入殊に他よりも活潑なるを覺ゆる、これ快事の四なり、其他の快事に至りては、只各自の感得に任せんのみ、

思ふ、文、武に勝てば、脩辭理通、煥然として、華なり、然れども、往々にして空文空辭に陷るゝ、武、恐らくは實踐窮行の美風を見る能はざらん、武、夾に勝てば、朴訥剛毅、巍然として直なり、然れども、往々にして狂暴粗野に陷るるなきを保せざるなり、嗚呼偏向の弊何ぞ一に此に至る、蓋し文は以て修むべく、武は以て習ふべし、兩者其均

平を得るを可とす、思ふに同朋七百の主は是れ關西の俊秀なり、朝に學を教室に受け、夕に思を燈下に凝らす、其文に於て開然する所なからん、只恐る、柔に失して活氣の消せんことを、況や國家増々多事、幾多事物の吾人後進に待つのもの甚だ多きをや、吾人豈に勉めざらんや、然れども思へ、國家の要する所は、顔色憔悴形容枯槁せる學者にあらざるなり、空理これ説き、操行常なき辯士にあらざるなり、必ずや、健全なる志操を具へ、然ゆるが如き活氣を帶びたゞ人士にあらんとす、或は云はん、武道を脩めて、はじめて膽力を養ひ得たるものは、未だ以て、眞正なる膽力を有するものと云ふべからず、事に臨みて恐れざるの膽にやりては、これ各人各自、沈思の間、熟考の裡に、之を自得し得べしと、夫れ然り、豈夫れ然らんや、蓋し其言ふ所の如きは、元より之に適合せる人あらんも知るべからずと雖、これ禪僧の如く沈靜せる膽なり、活動せざる膽なり、蛙の叢中に坐せるが如きの膽なり、而して此等の膽と雖、特殊の例に属し、直ちに之を以て全般に推すに至りては、蓋し謬見と云はざるべか

らず、武道はたしかに、人をして剛健なる膽力を養はしむるものなり、寒稽古の如き豈一兒戯として視るべけんや、若し天性之を行ふの勇氣なくんば乃ち止む、我之をなす能はずとなすなは可なり、己れなし能はずして、人の之をなすを見て、無欠席の證を得んがために寒稽古をなすは、小供らしき事なりと至ふものに至りては吾人また、此頑物に向て説くの要なし、

## ○鏡 開

凡そ一事を成し、一業を終ふれば、必ず其心中云ふべからざる愉快を覺ゆるなり、一月十二日以来、寒氣を忘れて、心身の鍛鍊に餘念なかりし健兒は、二月一日に至りて之を勤了せり、事小なるが如きも、これまた成業の樂なしとせんや、茲に二月四日、午后一時、瑞邦館に於て、兩部合併鏡開會を開く、來賓には中川會長を始めとて、武藤長尾の兩部長、兒嶋敏授、及び中島、野田、戸張、吉村の諸師範、南面して着席せられ、生徒は東面して坐す、先づ勝木委員は兩部委員を代表して簡單に挨拶し、次に中川會長は立ちて、兩部々員が、堅忍不拔の心を以て、首尾よく寒稽古を終へ

たるを祝し、更に二三の訓示を與へられ、終りて皆勤證を授與せらる、皆勤者は撃劍部に十八名、柔道部に四十一名なり、今左に姓名及び本數を掲ぐ、

### 撃劍部(本數の順による)

二百〇一	財部 伸二	百四十五	相良 武雄
百三十二	船田 一雄	百〇六	金城 紀光
百〇一	戸次 正	九十九	杉町 勝一
八十五	手塚 光貴	七十六	武 貫一
七十五	外間 現篤	七十三	大木俊九郎
七十	有澤 茂喜	六十九	内藤 善助
六十四	鶴山 三郎	五十六	井出龍之助
五十四	高原榮次郎	五十三	糸山 龍一
四十九	眞田 益丸	四十八	飯塚 孝眞
柔道部順序不同			
八十八	岸川 太郎	百〇七	平田 全祐
百三十一	中村 嚴	百十五	戸澤民十郎
六十六	徳谷豊之助	八十七	鷹取篤三郎
八十一	飯塚 孝眞	四十五	杉町 勝一
七十一	池田 嘉吉	九十二	副嶋豫四郎
七十二	松隈 三郎	百〇四	福島 尚純
八十五	坂巻 登助	六十二	須古 常六
百	梶谷鎖之助	百〇二	桑畑 彦二
八十一	守住 一男	五十九	山田駿太郎
六十一	岩下 貫	五十一	鶴見 宜清
百十三	常吉 徳壽	六十四	石川登喜次
百十四	津田哲次郎	六十	金野造酒藏
四十	白仁 三郎	六十	西 雄一



四十一	笠原 親次	五十四	古賀 傳吉
八十二	百武 泰彦	七十	土屋 龍雄
百〇八	八田 千町	六十五	鶴見 三三
五十二	大橋 太吉	八十一	矢野義三郎
三十三	赤松邦太郎	五十四	志波原諭一
未詳	廣瀬彌太郎	六十八	石川 重遠
五十九	成瀬 周治	七十	永田 興吉
八十九	佐伯吉三郎		

これより各數組の稽古ありて、式全く終れば、雜煮と汁子とは運び込まれぬ、岸川柔道高聲に、汁子連は左に雜煮黨は右に集まるべまゝと宣告す、拍手の聲場内を撼かす、かくて思ひ／＼に其好める方に着坐すれば、中には兩刀つかひとて、兩坐の境界線に坐するもあり、元より剛の者の寄り合へる事なれば、食ふ有様の目覺ましさは、大河の堤を扶するが如く、其速なることは、げに王良造父が馬を馳るにも比すべく、さしにも多き餅も、残り少なに食ひ上げたり、或人曰く、これ恰かも豚小屋に食物を投げ入れたるが如しと、これ蓋し嘲語なるべし、

熟ら兩部の皆勤者數を見、之を前數年に比較對照するに、吾人をえて感慨に堪えざらざるものあり、乃ち、本年度に於ける、寒稽古出席總員

數ど皆勤者の數を擧ぐれば、柔道部は、百十六名の出席中、皆勤者四十一名、擊劍部は、五十一名の出席中、皆勤者十八名、其數に於て、著るしく昨年及び一昨年に劣れり、殊に擊劍部を最とす、今、昨年及び一昨年に於ける、擊劍寒稽古の人員を擧げんに、一昨年に於ては、六十七名の出席中、皆勤せしもの三十一名、昨年に於ては、六十二名の出席者中、皆勤せしもの三十名、元より其數多まといふべからざるも、之を今年度に於ける十八名に比せば、實に之に倍するに非ずや、吾人切に疑ふ、寒稽古皆勤者の數は、學校人員の増加と、反比例を保つべきものなるやを、嗚呼校風の日に揚らざる怪しむに足らざるなり、よりて曰く、青年の時代は、或程度までは須らく小供らしかるべし、決して變癪なる大人を氣取るべからず、宜しく活潑なるべし、決して柔弱なるべからずと、是れ、吾人が小學教師に代りて諸君に告げんと欲するところ、諸君それ之を思へ、

今左に兩部に於ける昇級者及び編入者を擧ぐ

# 擊劍部

石崎 芳吉

戸次 正

上原 義雄

右二級乙へ

相良 武雄

右三級甲へ

内藤 善助

右三級乙へ

高原榮次郎

右四級甲へ

外間 現篤

右四級乙へ

眞田 益丸

右五級甲へ

大木俊九郎

右五級乙へ

多田 耕象

宇津 忠藏

柳川 眞榮

右五級乙へ

### 柔道部

白川 彌源太

右四級甲へ

岸川 太郎

大野 數枝

中村 嚴

右四級乙へ

徳谷豊之助

東 戸策

坂巻 登助

右五級甲へ

佐伯吉三郎

福島 尙純

井手龍之助

金城 紀光

野村 貞

須古 常六

有光 鬼茂喜

田尻眞太郎

高樂翁左久

太田 貢

手塚 光貴

飯塚 孝眞

糸山 龍一

武 貫一

彼末 利平

町田 守馬

北島 弘吉

於保 庫一

戸澤民十郎

鷹取篤三郎

副島豫四郎

上塚 周平

梶谷 鐵之助

竹添 一體

平田 全祐

池田 嘉吉

杉町 聰一

野口 徹雄

須古 常六

桑畑 彦二

友枝 照雄

常吉 徳春

金野 造酒藏

右五級乙へ

白仁 三郎

笠原 親次

藤堂 要藏

大橋 太吉

石神 長助

右六級甲へ

志波原 諭一

岸川 浩次郎

矢野 義次郎

右六級乙へ

山田 駿太郎

石川 登喜治

奥村 紀雄

古賀 傳吉

土屋 龍雄

廣瀬 彌太郎

永田 興吉

赤松 邦太郎

成瀬 周次

岩下 貫

津田 哲次郎

西 雄一

百武 泰彦

八田 千町

石川 重遠

鶴見 三三

奥村 政雄

櫻谷 源吾

## ○修學旅行規程の變更

今回新たに修學旅行規程を制定せらるる乃ち左の

如之

第一條 修學旅行ハ軍隊組織トス

第二條 修學旅行ハ三泊以内トス

第三條 修學旅行ハ本校生徒總數ノ凡十分ノ七以上出行スルニ

アラサレハ之ヲ行ハス

第四條 修學旅行ノ地方及期日ハ其都度之ヲ定ム

第五條 生徒ハ正當ノ理由アルニアラサレハ修學旅行ニ欠課ス

ルコトヲ得ス

第六條 修學旅行費ハ金九拾錢トシ之ヲ三分シテ金三拾錢ツ、

毎年一月四月及九月ニ於テ授業料ト同時ニ修學旅行費計掛ニ

納付スヘシ

第七條 工學部四年生及大學預科三年生ハ二月及四月分ノ修學

旅行費ヲ納付ヲ要セス

第八條 前條ノ生徒ニシテ卒業セサル者ハ其年九月ニ於テ金九拾錢ヲ納付スヘシ

第九條 前年休學ノ生徒ニシテ其年ニ屬スル修學旅行費ヲ完納セサル者出席シタルトキハ其年九月ニ於テ其不納ノ分ヲ併テ納付スヘシ

第十條 每學年ノ始ニ於テ新ニ入學ノ生徒ハ其年九月ニ於テ金九拾錢ヲ納付スヘシ

第十一條 既納ノ修學旅行費ハ返付セス

第十二條 修學旅行費ニ殘餘ヲ生シタルトキハ之ヲ次回以後ノ修學旅行費不足ノ豫備金トシ又ハ臨時發火演習ノ費用ニ充ルモノトス

第十三條 出發ノ當日俄ニ欠課スル者アリテ第三條ノ人員ニ達セサルトキハ修學旅行ヲ中止スヘシ此場合ニ於テハ當日ノ出欠ヲ調査シ翌日ヨリ授業ヲ始ム

## ○習學寮規の變更

明治卅一年九月新習學寮規發表あり之より、僅に三ヶ月餘を歴て其寮規を廢止之、新に新寮規の劃定を見る。變更寮規左の如之。

### 習學寮規

第一條 習學寮生ハ舍監監督ノ下ニ在リテ寮内ノ秩序及風紀ニ少キ各保維ノ責ニ任スル者トス

第二條 寮内ニ學寮會ヲ設ケ室長室長補及炊事委員長ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條 各室ニ室長及室長補ヲ各一名宛置キ其任期ヲ一學年トス

第四條 次學年ノ室長ハ每學年ノ終リニ於テ學寮會寮生中ヨリ其候補者ヲ四十二名選出シ室長補ハ每學年ノ始ニ於テ室長其室員中新入生以外ノ者ヨリ其候補者ヲ各二名宛選出シ學校長

ハ其中ニ就テ各選定ノ上之ヲ命ス  
但室長及室長補ニ若欠員ナ生スルトキハ新入生以外ノ寮生ニ付テ本條ノ手續ヲ經ル者トス

第五條 室長ハ其室員ヲ督勵シ兼テ其室整理ノ責ニ任ス室長補ハ室長ヲ補助シ同ク其責ニ任ス

第六條 寮内ノ炊事ハ自炊トシ委員長三名委員若干名ヲ置キテ其事ニ當ラシム其任期ハ各一學期トス

第七條 次學期ノ炊事委員長ハ每學期ノ終ニ於テ學寮會之ヲ選舉シ委員ハ每學期ノ始ニ於テ各室ヨリ選出スモノトス

但當選者ハ之ヲ辭スルコトヲ得ズ若欠員ナ生スルトキハ委員長ハ學寮會委員ハ其室ニ於テ選出ス

第八條 學寮會ハ會員ノ互選ヲ以テ會長一名副會長一名ヲ定メオキ其整理ノ責ニ任セシム其任期ハ各一學期トス

第九條 學寮會ハ本寮規ニ規定シタル事項ノ外舍監ノ諮問又ハ會員ノ提出スル議案ニ付テ審議スル者トス

但會員提出ノ議案ハ豫メ舍監ノ認可ヲ得ルヲ要ス

第十條 學寮會ハ毎月一回定日ニ於テ舍監臨席ノ上之ヲ開ク

第十一條 學寮會ハ舍監ノ命アルトキ或ハ會員四分ノ一以上ノ同意ヲ得テ由出ルコトアルトキハ臨時開會スル者トス

第十二條 學寮會ニ於テ選舉ヲ行ヒ或ハ決議ヲ要スル場合ニハ會員三分ノ二以上ノ出席アルヲ要ス

但選舉ハ比較多數決議ハ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第十三條 學寮會ノ決議ハ舍監ノ認可ヲ得ルニアラザレバ實行スルコトヲ得ズ

第十四條 寮則ニ違背シタル者及風紀ヲ亂ル者アルトキハ輕キハ其室長及室長補ニ於テ之ニ忠告ヲ加ヘ重キハ學寮會具事實ヲ審查シ決議ノ上舍監ニ申出其許可ヲ得テ會長之ニ忠告ヲ加ヘ若クハ舍監ニ何分ノ處願出ル者トス

## ○端艇擴張事務の進歩

端艇擴張部委員會は、愈々諸般の計畫を定め、委

員條本教授、及同吉田久太郎氏を先月中旬長崎に派遣し、池永造船所に至りて契約する所あらめ、更に、長崎醫學部教授醫學士久保成治氏、及び本校出身なる長崎船舶司檢所、工學士條原啓十郎氏に代表者を委嘱し、併せて造船の監督を托せしに、兩氏共快く之を諾せられたり、今新造船につきて聞く船を所を擧げんに、

端艇數

四艇四艘

長サ廿五呎

巾 四呎二吋

深サ 廿吋

價格

一百九十五圓

但機ヲ除ク

期限

三月廿五日

之を以て之を觀れば、吾人は二月を出でずして美麗なる新造船に乗ることを得んか、

此と全時に擴張部は、一方に於ては、上江津北岸神水村に於て、地面及び水域二百五十坪を借り受け、一方には材木を購入して、工事また大に涉り、將に端艇到着に先だちて其竣工を見んとす、

艇庫

長三十二尺

巾三十六尺

インクライン

長三十五尺

巾 九尺

ゴーランド 延長七十六尺  
かくきて、多年吾人の計畫せし端艇の擴張は、茲に一段落を終へ、今や吾人は只其到着するの口を俟つべきのみ、尙ほ向後に對する吾人の期望と抱負とに至りては、乞ふ之を進水の後に譲らん、

### ○學生と小野心

學生に尊ぶ所は人情の高潔に於て淺平無邪氣なるにあり、克く此心を持して講學の餘暇學校生活の欠點を補ふにつとめんか、人物修養に益するもの蓋し鮮少にあらざるべし。如此はまことに學生の本領にあらすや、而も事これと異り、動もすれば學生の本分を忘却して、放逸漫徒らに世の風潮に驅らるゝもの、其なす所實は區々の小名譽、小事業のために心力を消耗するものなるを發見するに至りては、憫憐の情禁する能はざるなり、もてそれ如此をして弊の止る所、獨り常人のみならしめば、未だ必らずしも憂ふべきともなさず、然れども學費はもと星れ、家庭にして其弊やゝもすれば他に波及するものあるを思はゞ、吾人少しく言なき能はざるなり、學權

の弊ある、朋黨の弊ある、排陷の弊ある、嫉妬の弊ある、皆是如此小野心家に源するものなるを知らば、吾人いたく戰慄せざるばあらず、今や政界の變動は激烈にして、其吾人學生の心志に及ぼす影響は決て輕視すべきにあらず、此時にわたり苟くも健全なる志操の養成につとめずんば、其弊や窮るところなけん、而して學生の所謂小野心なるもの、多くは此裡に胚胎するものあるを思はば、吾人豈に寒心せざらんや、由來吾人學生は銳氣勃勃たるもの、徒らに平和を願はんや、妄りに無事を望まんや、然れども勝劣なる動機によりて妄りに平地に波を起すの愚をなすは、決して吾人學生の面目にあらざるなり、唯磊々落落、公明正大、而て後凡日の事成すを得べく、以て樂を衆と共にするを得べきのみ、然るを徒らに利害得失の念を挾んで、喧囂紛擾を事とするもの、畢竟學生の体面を保つ所以にあらず、且つ學校はもと風教の府にして至公至明なるを要とす、權謀術數を用ゐるもの斷じて學校の神聖をけがすもの也、苟くも如此賤丈夫あらば斷乎とてこれが矯正に従事せざるべからず、是

れ獨り當人の幸のみならんや、蓋し亦學校の神聖を待つ所以なり、嗚呼學生の小野心の弊やはかるべからず、豈に深く戒めざるべけんや、

○是可忍也、孰不可忍也、

家を修むるものあり、嘗て大に震え、其の一壁墜つ、之を補ふに白紙を以てし、僅かに外觀を粧ふ、已にしてまた大風あり他の一壁を墜す、之を補ふこと前の如くす、然るに其家數年ならずして自ら敗壞せりと、これ何ぞや、蓋し之を補ふ其法を得ず、徒らに一時の外觀を粧ひ、以て修飾を得たりとなすに坐するのみ、此の如きを彌縫策と云ひ、姑息手段といふ、人事物の繁多なる、元より禍災罪過あるを免かれず、若しそれ此の如きの時に際せば、宜しく其因りて来る所を究め、其及ぼす所を探り、快刀一揮、直ちに其根を絶ち、其害をして他に及ぼす所なからしむべきなり、然らずんば、吾人は到底害毒の蔓延を防ぐこと能はざるべし、然るに、世人動もすれば、其禍の小なるを見て、之を改善するの策を講せず、自ら曰く、これ尚可なりと、只其の一時を瞞着して、以て足れりとなす、嗚呼始めはこれ一小禍な

り、遂に終生償ふなきを致すに至りては、其愚や實に惘然に堪えざるものあり、蓋之、これなほ可なり、これなほ恕すべしなる語は、人世にとりて尤も凶事なりとす、或は此によりて、大害惡を醸さず、大破綻を見ざる場合もあらん、然れども此時に於ては、社會の美風の全く消滅したるの時に於て、決て之を以て策の得たるものとなすべからず、吾人は、日常、彌縫策の多くの事に行はるゝを見て、其結局如何を思ひ、覺えず戰慄せずんばあらざるなり、噫、これを之も忍んで可なりとせんか、天下何れの事か、ふべからざるあらん、

### ○謹て示教を仰めんと欲す

(一新入生投書)

年末に當り學寮制の變更あり寮規又從て變更す我れ愚に於て寮規を通讀て一條の意に解せざるものあり第四條是也

#### 第四條

室長補ハ每學年ノ始ノニ

於テ室長其室員中新入生以外ノ者ヨリ其候補者ヲ各二名宛撰出シ學校長ハ其中ニ就テ

各選定ノ上之ヲ命ス

但室長及室長補ニ若欠員ヲ生スルトキハ  
新入生以外ノ寮生ニ付テ本條ノ手續ヲ經ル者トス

ハ新入生新入生、新入生は斯く迄に奪權せられざるべからざるか、抑も新入生に室長室長補なる重權？に堪ゆる資格なしとするも之を明文に記し置かざるべからざるか、其資格の有無に就ては之を後段に述べむ余は先づ之を明文に記すの果て必要なるかを問はむと欲す夫れ新入生は未だ本校の事情を知らず又寮内の狀態に暗玄始めて此に入るものにして『寮内の宗員を督勵之其整理の責に任じ』又は斯の如きものと『補佐』せしめむとせば余素より其不適任のことなるを知る故に若し撰出せられざるものは直に其任命者たらざる可からざる規定ならむには斯の如き規則の必ず要用なるを見るなり然るに我々學寮規は被撰出者即任職者なることを規定せず倍數を撰出したる上學校長更に之を撰定て而て後任命するにあらずや或は言はむ學校長は大機を統監す各箇人の適不適の如きは之を知るの必要あらざるべし果て然らば不適任なる新入

生を撰出すべからずと始めより明記を置くの便利なるに若かざるなりと余は答へて言はむとす苟も學校長の選定とある以上は能く標準を知れるを意味す又假令論者の云ふが如きとするも室長補の撰出(但書中室長撰出ハ暫ク之ヲ言ハス)は室長之をなすにあらずや苟も身室長に於て斯の如き見易き事理を解せざるが如くむば斯の如きは到底其他の事に於ても室長たるの職を盡し得べきものにあらずと夫れ綱領は素と簡明確なるを貴ぶ試に虚心に於て第四條を讀め如何に新入生の三字の異様に看取せらるゝかを悟らむ若し夫れ其の但書に至ては更に疑惑の道途に迷はせむるものあり新入生の文字頗る不漢なるが如きも其意入學の日より向一年間を指せるなるべし然らば第三學期に於て室長或は室長補に欠員ありとせば但書は所謂新入生の撰出を許さるを明記せるを以て尙其撰出を許さるべし思へ室長の選出は毎學年の終にすといふにあらずや第三學期の終りに於る新入生も又學年の室長となる資格あるにあらずや若し然らば第三學期の終頃に於る補欠員を新入生より撰出せたる

と其差果て幾何ぞ此に於て新入生無資格説も又消滅せざるべからず吁此規定なきも何の不都合起るなく而て有りて斯の如き矛盾生ずとせば尙此三文字を削るべからざる必要あるか前學期半頃に當り室長補欠選舉あり過る一新生常選す而て是れ實に學寮紛擾の導火線となりたるが如き或人曰く第四條の現出或は此より出でたるにあらずや果て然らば余は其迂愚なるに驚かざるを得ず新寮規は少しも之を懸念するに足らざるを示せばなり新入生たるものは宜しく舊入生に對て尊敬の念を有せざるべからず室長室長補の如き亦宜しく吾人の先輩を仰ぐを要す吾の不肖といへども又之を知る假令ハ新入生の撰出を許す過當撰するが如きことありとも新入生たるものは吾人を導く先輩のあるあり且其任に堪へざるを思ふて職を辭せむこと見れ余の願ふ所なり只等しく學生たるもの而て斯の如き權利に於て之を享有するの差違斯の如く大なるものなるやを疑ひ又之を明文に示すべきものなるかを迷ひ拙文を顧みず諸子の示教を仰がんとするのみ。然れ

必も余素と痴鈍、井蛙の見を以て事を律せむとす恐らくは其理の、他に大なるものあらむ、不肖禮に嫻はず暴言を敢てす恐惶措く所を知らざるなり然も疑念遂に晴れず希くは叱教せよ

### ○地方的團結及

#### 地方的感情の使ひ處

地方的團結は屢必要なるものとして認めらる、人類は社交的動物なるからは郷黨を結びて生活に便せんとするは策の得たるものなり、然れども郷黨の利害と自己の利害と相容れざることあらば、郷黨の爲には自己の利害を犠牲にする義務あり、此義務ありて初めて郷黨も成立し得るものにして此義務を盡さざる人は不徳の人たるべし、又一國の事を議するに方り一縣の利害の爲に國家の利害を顧みざる者あらば竟に不忠の臣たらざるを得ず、之を要するに一團體の前に其部分たる團體の利害を説くを得ざるなり、茲に第五高等學校あり、生徒七百各府縣より來集す若し此集合を一團體に非すとせば、吾人は學校の利害には敢て關知せざるなり、學校内に於て各縣人の利益を營む亦何を妨げん、吾人は

一泊せる宿屋の爲に特に其利害を考へければなり、然るに其昔我校内は宛然と五百の生徒克く和親きて、秋月先生は祖父の如くに思はれたり、故に完全なる於て之の團體に於て、曾て一人の學校を抛ちて郷黨の爲に營む者なかりき、後伊數年に於て校風は驚くべき急速なる進歩を爲し、然れども余は猶學校は一箇の團體なるをみるなり、

學校は一箇の團體なりとせば學校の利害を措て各縣の利害を説くを容さざるなり、而して寧ろ箇人の衝突より縣人間の問題を惹き起し延きて校内人心の和平を亂し、事あり、實際は縣の問題として解釋せしに非るべし、然れども平地に風波を起さたるは學校内に地方的團體としての行動ありきが故なり、事は小なれども余が所謂一團體の前に其部分たる團體の私利を營みたる一例と見るべし、故に能く快を買ひ且つ他を威嚇するに足るが如くなるも窮極すれば不利益なる結果を見出すことあらん、又其事たるや地方團結の鞏固を示すと同時に是を學校内に行ひし



は其形跡恰かも自家の利害の爲には國家の利害を問はざるに類するなきを得んや、是地方的感情の使ひ處を誤りし適例なり、而して是單に其一例に過ぎずして是等思想の流行せる今日の如きはなし

國に内亂の起るや上下を疲弊せしめ外侮を招き或は亡國の因を成す、其害毒測るべからざるなり、而して其因を察するに國家なる團體の内にありて威權を竊み私利を營まんとする者あるに基く、即ち團體の利害を捨て、其部分に奉ずる者なり、勝てば官、負くれば賊とは一つの遁辭にして嚴密に云へば私心を挾む者は賊なり、是確かなる標準なり、而して地方的の危むべきは此に在り、

一國も世界より觀れば一地方に當る、然らば余の論ずる所を以てすれば世界の利害の爲には國家を顧みざるべきが如くなるも世界各國對峙の有様を見るに未だ一團體と云て認むべからず、若玄世界を一團として見るを得るに至らば國家を措きても世界に盡すべきは當然の事なり、然れども今日に在りては世界に盡すよりは寧ろ國

家に盡さるべからず、地方的感情の用ひ處も此邊ならん、今の時一縣或は一舊藩の爲に國家に或は學校に私黨を樹つるは余の惑ふ所なり、請ふ試みに校内に於て地方的感情を去れ、和氣靄然たる一大家庭を現出せん、以て余が言の誤らざるを證するに足らん

## ○存疑 二

(瘦骨) 平

治者に一定の方針なくんば被治者は遑々如として其行く所を知らざるべし、治者の方針に乏て朝に換り夕に變せば被治者亦焉んぞ其歸着す所を得んや。此を以て治者の主義方針を定む宜ま、慎重の熟慮を以てすべく、一度び其方針を定むれば之を持する確固外物の障礙巡するが如き陋体あらざるを要す。吾人は一時の溫濕に萌え出でし春草の、逢秋落葉に乏て枯稿したるを見、松柏蠹々百年に益々繁茂するを看るなり。學で以て規らざらむや。

由來長く施行せられたる甲制度全く

制度となる此際に當りて統轄者たるものは時の  
關係を熟考し被治者に及ばず

如何を透察して以て事を處すべきな  
其始めに當りて必ずや舊制度を願望するもの

り又新制度の事に當るものに對て平なら  
ものあり以て新制度に對して反抗の舉に出る

ことあるを覺悟せざるべからず吾人は此が實  
を擧ぐるの迂なるを思ふ古今東西の歴史に於て

到る所に之を見出すにあらずや若き此期待の覺  
悟なくむば躊躇逡巡は之を免るゝこと難く遂に

事の真相をも究めずまて勿徬舊制に復するが如  
き失態を生ずることさへあり舊制に復する可な

らずとせず然れども舊制却て善なりとするもか  
くの如き團體を司配する際に於ては新制の害を

看破するの明なかりし罪殊に免る可らず況や新  
制度の施行未だ久きを経ず爲に尙其試驗中に

あるときに際し只外物の威嚇に遇ひて弱くも所  
信(あらば尙可なり)を枉ぐるか或は双方の觀心

を保たむが爲に所謂八方美人的の折衷怪なき法  
制を更出するが如きあらば是れ豈に統轄者の威

す。是尙可忍矣。被治者は夫れ何處にか適歸せむ。外界の障礙來らば來れ風吹かば吹け雨降らば降れ既に新制を施す其結果の如何を見ずむは斷えて之を排するの確固たる主張を有せざらむか。然らば始めより之を革更せざるの勝れるに若かざるなり。吾は再び繰返さむ。革新の始めには必ず幾多の障礙あり。此障礙に卓然とまて之を打退くるの勇氣なくむば革新の業得て望むべからず。況や新制今漸く此より之を試みむとするときに當り始め之を許したるもの忽ちにまて又廢するが如き是れ己の權を利用して下を弄するものにあらずや。人を愚にする亦甚矣。と謂ふべし。新制舊制の利害如何は茲に何の關係もなま。只如何なることたりとも。苟も新に事をなさむとするときに之が諸否の權を有するものゝ取るべき事を記すなり。

以上は余が從來抱懷する所の所信なり。き治者と被治者の一般の關係尙以上の如く、殊に其關係が師弟父子の如く親近なるに於ては乃ち訓導を要まて下の意を迎ふるが如きとある可らず。とは實に余が抱懷の思想なり。まなり顧みて之を現實

の事件に思ふ余は道途に迷ひぬ我が此の悔懷は誠に誤謬にてありけるかと不知誰か余が迷路を導きて疑惑を消せざる、識者の訓諭を俟つてと大。

二

人は單獨に生活し得べきものにあらす獨立自主といふといへども彼は何かに信依する所無くはあらざるなり之を無形にしては神に依るあり正義によるあり之を有形にまては眞友のあるあり同胞のあるあり然れども眞の獨立眞の自主は或物に依ると共に深く自己を信依す喬木に纏着せる蔓葛の類にあらざるなり

知らず社會に強風なしか暴雨なしか社會に強風なく暴雨なくむば喬木折れずして蔓葛又一時生存を得む然れども社會に波荒く風強し悲玄風雨一夜山郊に暴れて蔓葛碎けて遂に泥委せむとは吁人遂に蔓葛たる可らざるなり

被保護の境を出で、直に社會に溺れたりまど社會の潮流に航せむとすは其素養を要す他の保護をのみ受く素より一種の素養なるべし然共斯の如きは之

を幼少に施して適當の素養といふべき未だ素養の百一に過ぎず吾人に自信の力あり反省の能あり吾人の今日は素養最緊の時期ならずや自治は即ち吾人今日に形るべき素養ならずや

余は疑ふ今日の吾人は所謂『主權者の下に小波瀾なく安樂に依る』べき時期なりやを人誰か安樂を好まざらむや然れ共人生安を偷むを許さざるなり吾人の今日は自ら進で外物と戦ふの氣概を要するの時なり此時に際して學校、自治制を許すに生徒たるもの却て吾人に自治の能力なし希くは主權者に依倚せむといふて之を乞ふが如きことあらば是れ生徒の一大耻辱にあらざるか現今の所謂寄宿舎自治制なるものは決して完全のものにあらす否數多の弊害の却て大なるものあらむ然れども自治は飽く迄も吾人の勉むべき所ならざるか然らば此機を善用するを可とすべからざりしか

更に疑ふ、校にありて、習學寮自治に適せずとする迄に一地方の利をのみ圖らざる可らざるか人は國家の一員とると共に人類の一員なり吾人は所謂忠君愛國を稱えて正義を破り人道に逆ふ偽

善者の未だ大に讃ひべき所以を見ざるなり否眞乎に國を愛すると眞乎に人類の爲めに盡すとは決て相反馳せざるが如く吾人の兩途は眞乎に盡すものに於ては優に相兩立助力を得るを信ず然るに事の實際に見る往々にして相反するものあり余は更に之を近時の事件に見き亦余が抱懷の誤れるか疑雲更に我を蔽ふ識者の叱訓を俟つこと亦大。

### ○勝海舟翁の逝去

嗚呼幕末の事吾人また云ふに忍びざるなり何れか是れ直、何れかこれ曲なる蓋し錦旗のひるがへるを見んまでは未だ何れか官か何れか賊かを判別する能はざりきなり況や其曲直をや嗚呼幕末の事吾人また云ふに忍びざるなり失政は即ち失政ならん無能力はたきに無能力なりきならん而も幕府三百年來の恩澤に浴せき譜代旗下の士にして之を失政とし之を無能力と云直に以て之を捨て、顧みざるは人情忍ぶべからざる處なり夫れ常人の感奮興起すること甚しければ則ち猛進直行非常の事をなす此時に方りてやまた前後を顧みざるなり譜代旗下の士が幕府と共に斃

れんの覺悟を起せきも畢竟是れがためのみ況んや此間に多少の誤解ありきをや斯かる紛々擾々の中に際して徐ろに大義の存する處を察し快刀兩斷一身を獻げて將軍恭順の誠意を明らかにし逆境に處して忠義を全ふし爲めに宏壯美麗なる江戸城と繁榮なる江戸市街とを以て灰燼の災を免かれき翁の功業偉大なりと云ふべき是に於てか朝廷翁の義を嘉みき翁の材幹を用る數々要職につかき後樞府に列し年八十を越へてなほ熱心機密に參す其日常閑散の餘時事を談するや痛論熱罵人をして覺せず快を呼ばきむるものあり然れども言外に含まれたる大眞理は後進の指南となるもの甚だ多し宜なるかな海内人士の欽慕措かざることを而て今や乃ち亡し矣嗚呼今より後誰か社會に向て項門一針を加ふるものぞ世人頗りに元老の凋落を慨す吾人は翁に於て一層痛惜の情なき能はず。寒月空しく梅花を照らして天地轉た寂莫なり情更に強きを加ふ嗚呼悲哉

嗚呼翁が残せる瑞邦館裡の「入神致用」は日々仰て吾人の戒となす所而して翁や逝けるにあらずや

## ○近時片々

▲久しく我校教務掛として校務に盡瘁せられし片嶺忠氏は先般學習院教師に轉任せられたり吾人は氏の去られたるを惜むと全時に其榮轉を祝せざるを得ず

▲福岡縣東筑尋常中學校長なりし大森藤藏先生は第五高等學校教授に任せられたまへり

▲本校講師小島伊左美先生は今回教授に任せられ高等官七等に叙せられたまへり

▲三部江龍俱樂部は本月十九日に一部は二十六日に各競漕會を開けり其概況は之を次號に掲げん因に記す二部有明俱樂部も亦來る四日に競漕會を開くと云ふ盛なりと云ふべし

▲習學寮内の法科生諸士は今回大に演說討論を獎勵せんため懇話會を組織したり美學と云ふべきなほ其規約及び方法の如何は聞き得て之を報せん

▲本校体操科教官嶋野四平先生は學寮主任心得を命ぜられ給へり吾人は切に先生が体操場裡に於て三軍を叱咤せらるゝの勇姿と果斷とを以て學寮事務を處理せられ剛柔並び用ゐてよく寮生

を去て風靡せしめらるゝことを信するものなり  
▲課外講義の行はるゝもの武藤教授の古文書學丸山講師の獨文典及び松原講師の佛語等を其主なるものとす吾人は何時も乍ち諸先生の熱心に感服せざるを得ず

▲我習學寮は二月十五日自炊制度の第八回紀念の祝賀をなせり其詳報は吾人已に或人に托し今其起草中にあり

▲第二學期炊事委員長は會計長厨川肇氏保管長鈴木棟一氏購入長千手正澄氏なり

## ○年賀狀

本年に當りて我會にあて年賀狀を寄せられは實に左の諸氏なり茲に謹みて之を謝し并せて諸君の萬福を祈る

### 順序不同

相浦雄太郎○柏木正文○中村克巳○本田弘○友枝高彦○青戸信賢○岩佐尙一○加藤靜治○鶴田祿士郎○甲斐一之○吉丸一昌○小林一男○川崎齊一郎○牧山熊二郎○安岡鐵次郎○石坂二郎○加賀本長之助○楠田義任○高木敏雄○太田重知○藤村作○松井元興○十時彌○松本喜四郎○吉川岩喜○西澤知彦○岩野直英○岩崎小四郎○久世庸夫○藤岡繼平○船橋正心○植林林二郎○末松借一郎○大野盛郁○俣野義郎○上原新太郎○吉田義作○直村盛之助○八波則吉